



化財の補修などを手がける宮大工は、別名「渡り大工」とも呼ばれるように、全国各地の寺社仏閣を移り歩いて仕事をを行う。現在、沖縄初の純木造神社である宮古神社改築工事の棟梁を務める西武彦^{（2010）}さんも、そんな宮大工の一人。もともと福岡県大牟田市を拠点に九州全域で活動していたところ、知人を通じて那覇市内の住宅工事にかかわったことをきっかけに続々と声がかかり、気がつけば足かけ5年の沖縄暮らしに。

「沖縄にはない日本古来の伝統木造建築を造って、見た人に感動を与える喜びがある」と話す西さん。今年6月までは約半年間、那覇市首里にある安国寺の工事に携わり、総ヒノキの木造寺院を建立した。木材は西さんが直接ラオスに足を運んで仕入れたもので、樹齢はすべて350年以上。数年後には入手不能になるような希少性の高い高級材ばかりだ。

「組み立てるだけでなく、樹齢などの特性を見極めて“木を生かす”ことが大工の役目。若いころから山に入って原木を仕入れ、製材まで手がけてきたから、木を見た時点で完成後のイメージが湧いてくるんです」

2006年には首里城の「書院・鎮之間」^{（2010）}復元工事で障子指摺を執るなど、その腕前は折り紙付き。そろそろ福岡に戻ろうかな、とこぼすこともあるが、重要な任務がまだ残されている。「地元の人を育てないと、宮古神社には若い職人が何人か付いてきているから、ゆくゆくは彼らが沖縄で技を伝承していけるようになるといいね」。そう言って笑う西さんの表情は、今や



沖縄県で宮大工として活躍する

にし たけ ひこ
西武彦さん



◀ 職人生活にはさまざまな道具を使いこなす技術が不可欠。もしも一本あれば出先にかかるすべての寸法や角度を測ることができるように。